

週日の説教

金 大烈 神父 2011年4月15日(金)

《包容力 一違いを受け入れる一》

主の平和

今日イエス様を、石で打ち殺そうとしたユダヤ人。そのユダヤ人がイエス様を殺そうとした理由は、神様を冒瀆したからでしたね。本当に神様を冒瀆したから、人々はイエス様を殺そうとしたのでしょうか。いいえ、そうではありません。自分の頭に思い描いた執着、自分が知っていた神様と違う神様を話していることに耐えられなかったからでしょう。

私達はどうか。「違うこと」とはどのような意味で受け取っているのでしょうか。思いやりとか、考え方とか、色々好みが違う人に出会った時に、瞬間的に皆様は、拒否感を見せているのではないですか。あの人はうるさいとか、口が軽いとか、ある人はあまりにも黙っているから口の中が腐るとか。自分と違う面を持っている人々を、初めは嫌な気持、そして遠ざかる気持ち、極端的に言うところ「あの人を私は赦せない」というところまで行ってしまうのが、普通の私達ではないでしょうか。よく考えて下さい。そういうことによって全く必要のない敵対感を作ってしまうと、その人には近づいて行きたくない。挨拶してくれてもあまり嬉しくない。私の方から先に手を伸ばして「お元気、大丈夫ですか。」と、このような簡単な言葉さえ口から出したくないのが私達の弱さではありませんか。

結局、違いを罪とする、自分と違うことを犯罪化するという癖が、傾きが、私達にあることを意識して、いつも気を付けなければいけません。皆様が嫌だと思う人は、皆様にそんなにも罪を犯しているのでしょうか。そうではないと思います。

私は日本語で一番気に入らない言葉があります。あまりにも軽く、簡単に使う言葉、「絶対赦さない！」よく使いますよね。その意味は分かります。「あの人が赦せない。」相手は赦せないぐらいに、皆様に大きな被害を負わせたのでしょうか。神様を殺した私達は赦されたのです。それはよく分かっています。「憐れみたまえ、主よ、憐れみたまえ」と毎回私達は歌っています。そのようにして自分の赦しは求めても、自分がしなければならない赦しは絶対したくない。これはどういうことでしょうか。

皆様、全てのことは全く同じです。赦せないぐらいに罪を犯した人に出会う機会など殆どありません。自分の親が殺されたのでしょうか。自分の財産を全部奪われたのでしょうか。そんな目にあつた人はこの世の中でどの位いるのでしょうか。大体私達が憎んでいる、嫌がるその相手は、そのようなこととは距離があります。そういう人々が殆どでしょう。ただ違うことによって、もちろん私が正しくて、相手が間違える可能性もあります。しかし逆に私がこのように強く信じているのが間違いで相手が正しいかも知れません。

今日イエス様を殺そうとしたユダヤ人達。今の私達の目ではイエス様が正しい。正しくない者が正しい人を裁こうとしているので、私達は納得が出来ない。しかし、このような働き、このような動き

が、私達の間でも沢山起っていることを意識しなければならないと思います。

今日の福音(ヨハネ 10・31-42)を通して「神様を冒瀆するからだ」というユダヤ人達のイエス様を殺そうとするその心は、実際に冒瀆とは全然関係がないことをもう一度考えてみましょう。彼らが腹を立てたのは、自分が信じてきた、執着してしまっただけ、いい言葉ではこだわってきた心に触られたからです。そういう意味で私達も自分の心をよく見る必要があると思います。

皆様、“包容力”という言葉がありますよね。点数にすれば、ご自分は何点ぐらいになるのでしょうか。“包容力”簡単に言うならば受け入れる力です。抱きしめる力です。「ちょっと相手が間違えても、外れてもいいよ。もう一回やり直したらいい」と、相手を配慮しながら抱きしめるその“包容力”。ご自分が損になっても点数は高い方がいいでしょう。

ありがとうございました。